

成田名所図會

四

成田叅詣記卷四目次

佐倉佐倉城

八幡社

海隣寺

古文書 千葉氏遺物

常胤木像 貞胤木像

本條倉町佐倉故城址

千葉系圖二種

萬千代殿屋敷

大佐倉村長勝寺

福德二年窆口

清光寺

大樹寺殿御齒骨墓 正安二年阿弥陀銅像識  
古硯 無歲月觀音銅像識

應永二年雲版 古文書

大佐倉村勝胤寺

千葉氏遺物

印播沼

柳條村淨泉寺

應永二十二年雲版 古文書  
天文廿三年觀音像

成田叅詣記卷四

佐倉城 印播郡鹿島山あり

今の城地と鹿島郷と云ハ古きこゝ見多  
永禄八年海隣寺佛識小見えたり

街坊六町

田町新町弥勒町本町

江戸より十三里十八町餘天正十六年七月千葉介邦胤  
卒一十月北條氏政うららひ小て新館と此地小營々邦胤の長女

東として居しむ家臣村雅樂介

此小傳く同十八年七月小田原落

城の後ハ嗣子重胤流落一東ハ大府の後宮小仕ふ是歳八月小久野

三郎右衛門尉宗能封せしむ 民部小任に 一万三千石 宗能率し子民部少輔宗秀

嗣く慶長七年宗秀封と遠江の國久野小轉一廢城とす同十六年

土井大炊頭利勝改め築く元和元年城溝功成て移居は是より本州

要鎮の治城とす

ハ幡社 大佐倉村小あり社領廿石 天正十九年 社の傳詳ならぬ八月十二日

の祭祀あり此日酒々井へ神幸競馬の祭あり別當と大櫻山寶村

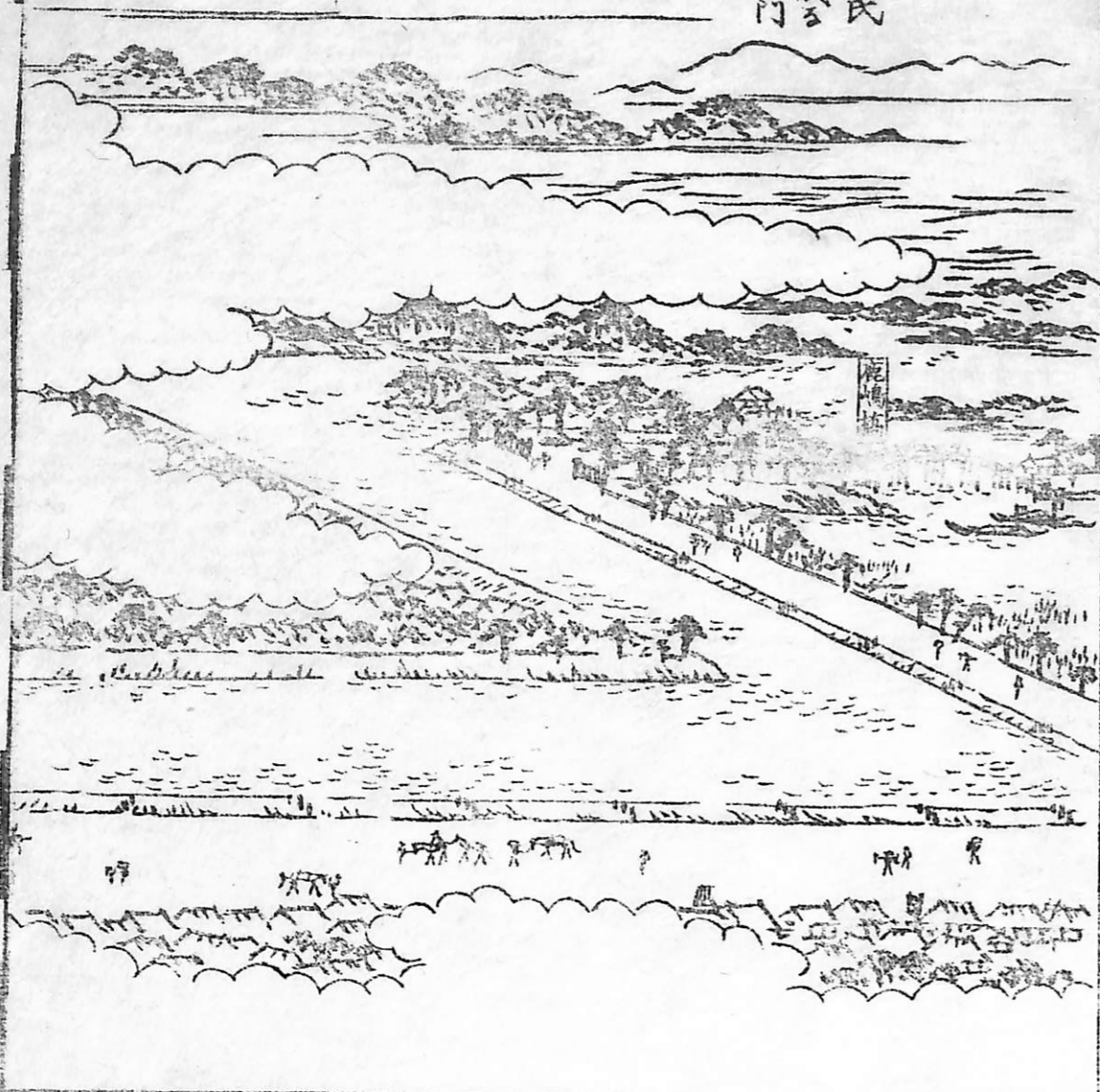
○成田叅詣記卷四

〇一

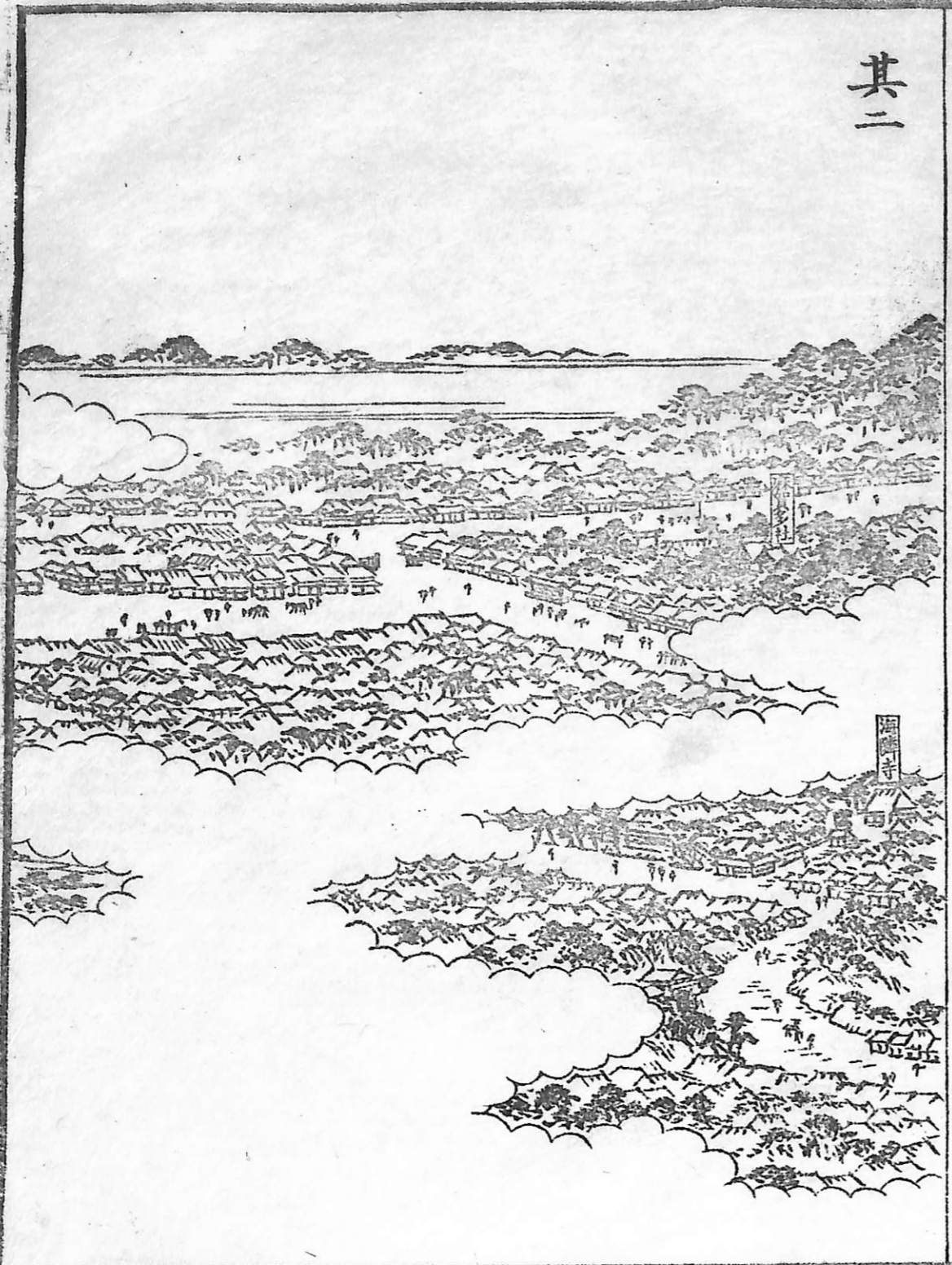
佐倉城

乃圖

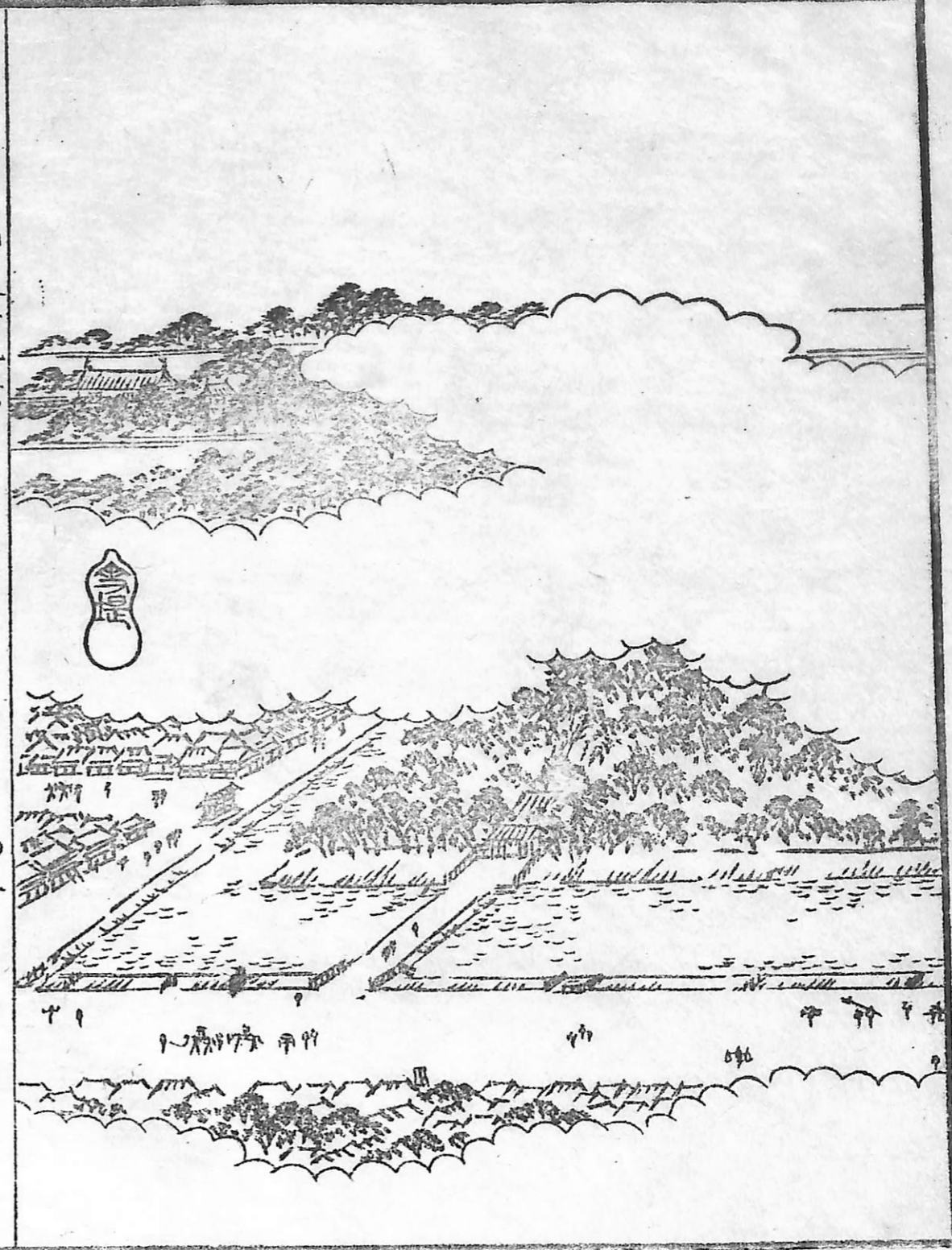
大手門とテ字門と云ハ里見氏  
の門と云ハ手斧子の義  
と一三門ハ千葉家の大手門  
と云



其二



○成田参詣記卷四





佐倉の本町元康島宿と云千  
葉家本佐倉小治城の宿あり  
た一の宿あり今猶継場ハ此  
宿ありつとむと云



院と云開基詳ならず中興ハ永徳三年たり 什物小其年号成るるあり  
 千葉山海隣寺 鎬木村にあり寺領三十石 慶安元年八月 時宗にて相摸  
 麻山無量光寺末たり本尊ハ阿弥陀如来寺に傳ハ千葉弁常  
 流治承三年七月廿六日 今モ此日小 子孫と具シ海邊小出て月と親シ  
 をり海上異光あり此ハ命して網と打むる小金色に阿弥陀像成  
 得たり文治三年に馬加地小寺と建て其像と安ん即ち此寺なり  
 元ハ真言の道場なりしハ貞流一遍上人と帰依せし後ハ時宗となり  
 他阿上人真教大和尚と中興と云 一遍上人九智真ハ伊豫の河野通廣の馬  
 加藤胤千葉介胤直の後と受千葉より本佐倉小移りしをり 此地小  
 引寺と云と云 常流胤直の影像あり高五寸許り  
 本佐倉故城址 本佐倉根古屋地地にあり 根古屋と昔ハ柵戸と云ハ春徳  
 即將門山の故城址なり 此城昔はさまハ大手ハ今の 町の邊に

海隣寺所藏文書

奉寄進海上月越如來

不送四

馬加御付降佛  
椿田保神館末

奉

右意趣者之長地久御願

圓滿殊平身流第而取

交言成就故奉寄進如件

延文五年卯月某日

富永痛  
光胤

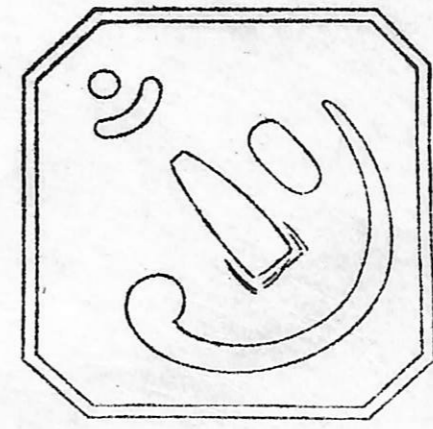
同千葉氏遺物

箱識

千葉氏之友

紫銅覆輪下地鉄ナリ

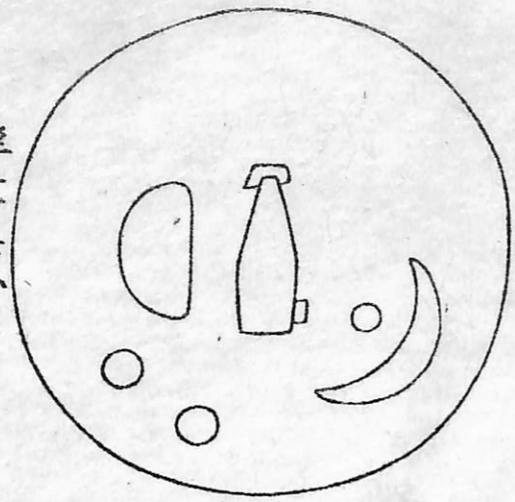
徑二寸七分



○成田泰諸記卷四

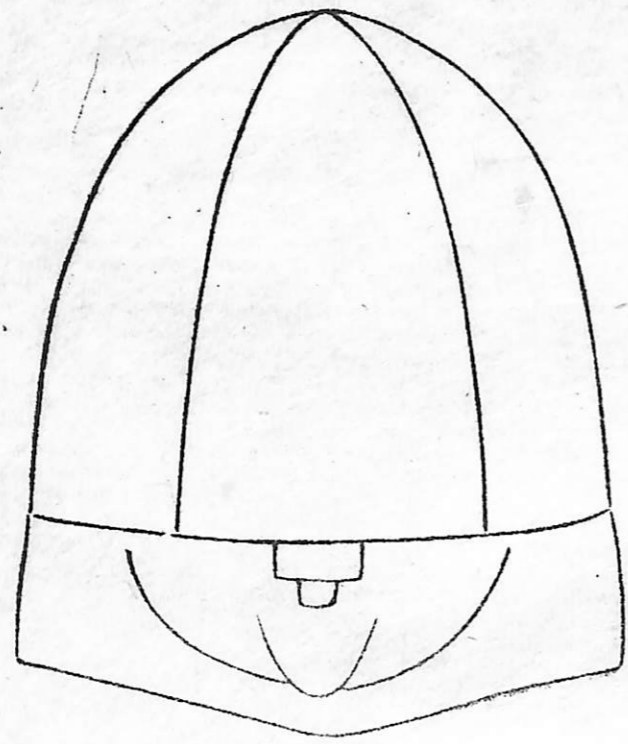
○四

同鐵鍔



徑二寸七分

同兜



外ニ鏡五面 方鏡一 裏ニ月星紋アルモノニ 龜形アルモノニ  
杯ニ一龜窠形一八尉ト燒ノ形アリ 雀龜八千葉ノ別紋アリ

同寺千葉介常胤肖像丈ヶ八寸  
 又貞胤像ト云アリサレド面貌同シテ  
 辨知シカラス只両手ハナルニミ



○成田恭請記卷四

○五

敬白 奉刻彫阿弥陀

如来并二菩薩像  
 厥造像意趣者  
 辛朝臣親胤眼

以上同寺持佛阿弥陀如来木像識  
 丈ヶ八寸

千葉介貞胤肖像

阿弥陀佛爲煩證仏果之  
 爰以則離三有繫縛キ女  
 執速至安養無垢淨刹  
 無疑者ヤ仍法界普利  
 下慈因印東在佐倉  
 長徳寺開山眼阿

佛師淨慶

于時永禄八年五月十四  
 于庶嶋御印播郡  
 彫之

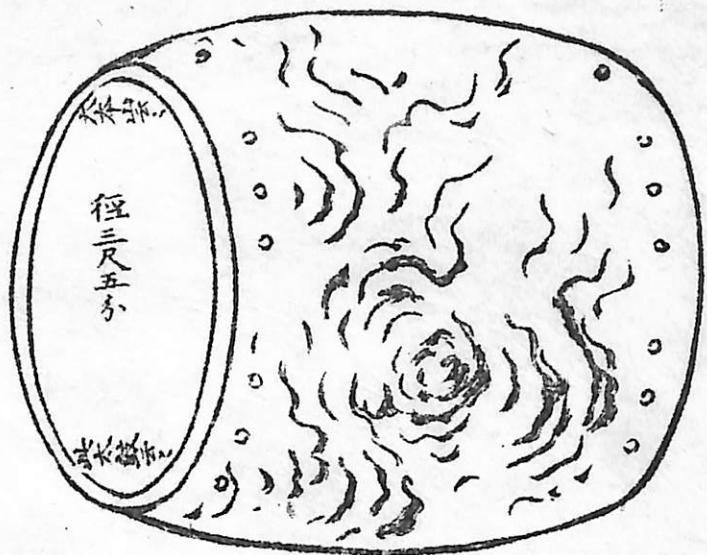


同寺蔵太鼓胴

大本山箱州無量光寺ニ而四十代  
當寺從中興七世

本蓮社欣譽他阿  
尊海上人代

此太鼓之木者御城主  
稻葉丹後守様將門山  
壹丈壹尺五寸廻之松木  
被下是ニ而掘申候  
宝永三丙戌歲六月日



此太鼓

二の門しん今神明社の華表くわひょう所ところなり長祿中馬加康胤乃子輔胤千葉  
より此小移りこうつりより九代重胤しげのぶ小玉こたまり天正十八年七月小田原おだわらと共小城  
陥おち了八月之野三郎左衛門尉宗能むねよし今紀州家附之當時このころ此地小封こませらるる  
年中子民部少輔宗秀遠州之野のの所替かへりて廢城はいしやうとす後後のち後のち十四年土  
せらせり城と鹿島かしま地小改め  
築つくり今いま佐倉城さくらぎとなす

○房總治乱記小天正十八年八月九日領地拜領四箇國の分わけき佐倉さくらぎ

監物けんぶつ美次みじ一ひ万石  
佐倉之内さくらぎのうちに 山本やまもと帶刀おび頼重よりしげ と見ゆ  
左衛門宗能ざゑもんむねよし任民部にんべんぶ 助庸すけむね 藩翰はんこん潘はん下した係國けいこく北條きたじょうの地のち 五十いそ石  
佐倉之内さくらぎのうちに 三郎ざぶらう

○將門しょうもん山の地へ承平じやうへいの昔むかし一平いちへいの將門しょうもんの構かませし址あてなり普通ふつう奉ほう今昔いまむかし物語ものがたり  
十四じゅうし小時じふし將門しょうもん舎弟しやてい將頼しょうらい將平しょうへい安房あはら守興しゆきやう世執よしとく事こと佐倉さくらぎ太郎たろう以下以下七百  
餘人あまのりを引具ひきぐし為行なせゆく方かたと尻目しりめににふららんて勝かつむらたる秀郷ひでさと九千いっせん餘人  
小舎こや釋しやくももなくくけけああととせせと  
普通ふつう奉ほう今昔いまむかし物語ものがたり  
佐倉さくらぎ太郎たろうととありあり輔胤すけのぶ其その



故址小よりしを也

○関東古戦録に下総國印播郡佐倉の城今本佐倉千葉介胤富ハ往一

酉天正十三年の歳五月七日逝去紀年語子息新助邦胤二十六歳小一

替と所も今既今小四年と経たり天正十六年房徳治乱記十三年戊子正月初

自新西嘉儀として旗下の士大将六七人佐倉城ハ来て毎例の

礼式と整へ書院小於て饗應ある時小鎌田鎌田ハ鎌田の誤也治乱記

万五郎と之る近習の冠者ハ八歳治乱記廿かりし一歳に作配膳と勤る間に放屁

とるる両度小おふ邦胤大小怒て眼をいらけ奪一めて叱ら終ハ終ハ五

郎其坐中中央に踞坐平尔の失礼ハ庸常者ぬさるる時を暗る

坐中に於て形の如く靦面ハ辱しめと蒙るる素懐ハ合さりと憚る

なくしける故邦胤ハ堪た差差立掛りけたふハ短短刀刀小手と掛り連し

と引立て退去なりり列坐ハ士大将免小角角に宿りて推津江水水小

○成田泰詣記卷四

〇七

召預けこし置けるる元より微微者者たらしハ差差異異と辨はりし小及及り

て不覺の答答小小至至れる素其答と赦免ありし旨連連るる者他他けけりし関

五月中旬勅氣とゆるし社出動して居居たりしるる京初初首尾首尾無念無念小小た

もいはりし折折ありしハハ鬱憤鬱憤と散散るるとと二二三三時中隙と伺伺ひし程に七月四日

の夜半半斗斗りり竟竟小邦胤の寐間ハ忍忍入りし二二刀刺刺て逃逃出出たりし千葉介介起起りして

憎憎小世世悻悻りし所所為為我我と唯唯一一色色ハハ社社一一次次の間間小居居たりし宿直の者

とも聞付て走り入りて見侍見侍ハハ邦胤の朱朱般般小成成て鎌田めと脱脱さしハハ打捕打捕社

と漸漸小云捨捨て事切切たたるる△本寺過去帳小邦胤の鎌田孫五郎在乱して沖額

七月五日小家人小仰天してハ方方手手ををととりし搜搜一一社社とも見見ええざざりし鎌

田ハ夜中の事を社ハ城門と閉閉たりし暗暗ささハハ暗暗洩洩出出ん方方方りしすす物

陰小隠隠社居居て曉曉天天小至至りし堀堀と乘逃乘逃奔奔るる菊間の臺臺までまで行行くく追

手手能能人人救救前途小充満して中中逃逃るるささややりしるる社ハ林林の中中へへ行行くく

手能人救前途小充満して中逃るさやりる社ハ林の中へ行

入て腹搔切て失小けるハハ介流の息男千霍九僅小六歳の義なる千葉城譜第  
此家人亦相議して先して南方へ遷進し氏政父子伺ひけり千葉城八千葉  
小田原佐倉ハ敵地小とさする要樞の所なりとて臼井此城主原式部少輔  
胤成と佐倉小移し入社て軍代小定め千霍九と小田原に招て家臣とも  
此人質とぞせり此なるに新助重胤と号せしハ是なり老臣設樂左衛  
門尉相從て南方へ趣介輔してこを居たをけ此千新丸の姉十二歳小て有  
しと是も氏直此下知として其年の十月總州加島今加島ハ鹿島山のこと云  
処小新なる屋形と補移此社てけり中村雅樂介介佐の臣と成て養育の功  
とこを勵まける千葉家小於て四老とてハ原圓城寺印播郡城村小圓城寺  
建るとこ本内鋪木此社を圍城寺武州石濱此千葉に属して總州と離散  
其後ハ三家老と此社中にも原式部少輔ハ元是當家の一族とて小金  
此高城源二郎胤則土氣此酒井伯耆守康治東金の酒井左衛門佐重政

○成田泰詒記卷四

執父余流たもて城持此旗下も手に属け大身なる士大將なるとこの故小園東に  
て下此上小優れるたると小千葉百騎原ハ子騎の大將とも千葉に原原に  
高城兩酒井とそ里俗此常談ありしとて天正十八年小田原陣此とて千  
鶴丸重胤の軍代として式部少輔胤成ハ千の人数と司て相州湯本口を  
ちりたる此北條家滅亡して千葉家も没落せしに 大神君泖入國の  
後式部少輔此倅主水佐後平内此弱たりしと泖旗本に召出此泖近習  
の列小加へり行し天正教の宗門と信仰する此科りたるて慶長十九年  
此秋刑罪小處せり此断絶しけりとなると千葉介重胤幼少小付て家  
臣小佐倉此城と抱る事能はず本意忠勝酒井家治小園渡しける此累  
代の本領と離れて逐電しけるなり 大神君關東泖入國の後總州筋の素  
内者小せらるべと賢慮とて彼回臣海上△海保を三吉押田庄吉并臼井の  
原式部少輔胤成の子主水佐东金の酒井左衛門佐重光前重政とて子金

三郎おと御旗本に召出されし汝曹の本に千葉家には正統の子孫はなごころ  
 と御尋ありに海上押田思案と巡らし先年邦流に系人土方(主用)にたあ  
 り登りける時 大神君に御使者を遣せしとて途中にて出會ひ論じて千  
 葉家人以外狼籍したり事ありし故又この爰を思召出されし御遺恨  
 と果さざるに御存念小まや心海連して邦流を年撓死小付令嗣(な)  
 女子一人北條氏康の息女に腹小これあはし遠聴しけし(さ)しもの豪家  
 断絶の事不便に爰なるを仰られ件の女子に扶助料を下し賜り重胤ハ  
 長く浪宰をたすけし是併押田海上の邪心に賢慮を起りて申をせしに  
 據りたる之良小忠の不忠とあり(氣)數の命こそ墓たるに(或云東金左工  
 の流ふあらはる系遠江より御取とありと大料取の侯將を利の後と見えたり  
 土氣東金の先祖とあり○家系に重光なり政康の子ハ金三郎政成とつふ

○新編鎌倉志五卷ニ千葉屋敷ハ天狗堂ノ東ノ畠ヲ云相傳千葉介常胤ガ  
 舊宅ナリ東鑑ニ阿静房安念司馬ノ甘繩ノ家ニ向ト云ハ是ナリ司馬

○成田泰譜記卷四 ○九

ト千葉成胤ヲ云ナリ成胤ハ常胤ガ嫡孫ニ胤正カ子ナリ ハ千學集并谷殿  
ト称ストアリ

○千葉氏系圖二種 ハ千葉系圖數種ありとも善本は終なき余ハ所見よりハ香取田所本  
水府松籬館を頗る簡淨と云又編本本四巻あり詳明なりて蓋  
難と云ぬれり故小田所本松籬館本と附刻は若し其の異同得失ハ言長け終ハ畧に



源時 錦木八郎  
 源定 日三郎  
 源嘉 日三郎

信清 白井十郎

相馬三郎 日三郎  
 相馬 日三郎  
 相馬 日三郎  
 相馬 日三郎  
 相馬 日三郎  
 相馬 日三郎

源村 子三郎  
 源村 子三郎

源宗 日三郎  
 源宗 日三郎  
 源宗 日三郎

武石三郎 日三郎  
 武石三郎 日三郎  
 武石三郎 日三郎

○成田泰諸記卷四

○十

源盛 源重 廣流 源村

源氏 日三郎  
 源氏 日三郎  
 源氏 日三郎

源信 日三郎  
 源信 日三郎  
 源信 日三郎

源時 日三郎  
 源時 日三郎  
 源時 日三郎

源村 日三郎  
 源村 日三郎  
 源村 日三郎

日吉乃左進入左

重信

信常

女事在谷日吉乃左進入左

貞康

貞宗

成光  
乾藏

日八郎  
則泰

國分五郎日吉

日吉乃左進入左

常朝

重常

朝後  
朝後

○成田參詣記卷四

○十一

國子居

日吉乃左  
光隆

日吉乃左

女子

親隆

源通親領

日吉乃左  
源朝

時通

源朝  
源繼

日吉乃左

梶田日吉乃左

有通

信隆

有氏

梶田日吉乃左

此系天正以前ノモノナド必セリ惜ラズ前後欠損シテ全カラス其全ヲ看シ人補テヨ

千葉氏系圖

相馬 武石 大須賀 國分 東

今千學集云屋形サ御紋ノ月星ノ以前云松竹ニ  
霍ノ九ニ松竹ノ御家ノ紋ニナサレ鶴ノ九ヲ八海上ハ  
進上セラレケルカ後ニハ雷電ニテオハシクル云々

高棟王

△久安二年文書又永曆二年三月廿七日平常胤文書ニ良文經明忠經經政經長經兼常重トアリ  
是千葉家相續ノ次第ナリ

高見王

高望王

良望 常陸大掾

將弘

良房 常陸大掾

將門

良將 鎮守府將軍

將賴 御厨三郎  
下總守 女如藏  
禪尼

良兼 上總介  
長田祖

良定

將平 大葦原四郎  
上野介

良文 村岡五郎  
一名重門

將為 將三郎

○成田參詣記卷四

○十二

良生 常陸六郎

將武 伊豆守

良繇 從五位上總介  
鎮守府將軍 忠光 常陸掾  
常高

出現 兄同誅

良詮 從五位下  
上野介

良持 從五位下常陸少掾  
孫在九州 良海 四滿院  
入道

良廣 駿河十郎

將國 信州太郎 文國 小太郎

忠通 村岡小五郎  
大場梶原祖

為通 駿河守

忠頼 村岡次郎陸奥守從五位下  
為將門智繼跡

景遠 三郎

朝義

景光

貞元 子孫在九州

千世丸 父同誅元

女 如藏禪尼卒年八十餘号常念地藏  
世号地藏尼

三 將常 秩父武藏守

一 忠常 武藏押領使  
下總介

二 賴尊 山伏号山邊惡禪師  
土肥祖大乃

賴望 小太郎 常望 相馬小次郎

兼賴 小次郎 或作長望 子非 將長 長望

重國 小次郎 始号相馬 胤國 次郎 師國 相馬次郎

二 常將 千葉小次郎居總州千葉因氏烏  
創建平山寺

恒親 安房押領使 恒仲

恒遠 賴任 村賣有

胤宗 武藏七黨内野与黨祖

元宗 基永 野与六郎

師常 相馬小次郎 實千葉常胤二子養子  
才繼相馬領奥州行方郡下總相馬  
郡元久二年十一月卒六十七或聲三作儿

常永 四郎大夫武藏押領使源義家命名  
法号覺永又永元

恒直 埴生次郎

○成田泰諸記卷四

○十三

常兼 女佐竹左衛大夫室

常房 女結藏集人正室

賴常 原三郎 常益 岩部五郎 粟飯原家督

常慶 匝瑳八郎 女伊藤大七室

女速山小太郎室 女里見新左門室

常通 父常長名代 常景 兄常兼時時死

常季 長南左門尉 常盛 平山季高養子

常時 元宗

四 常兼 後五位下總權介号千葉大夫  
本郡檢非違使所法名觀者  
鴨根三郎或称千田

常房 常遠 安西七郎

常繼 大須賀八郎大夫

常時 相馬小次郎

元宗 周防八郎

常尊 相馬六郎

近永 野与庄司

常金 原四郎

常益 粟飯原

常能 金原庄司

胤隆 武射七郎

胤光 推名八郎

恒永 奥州戰死

恒宗 大藏次郎

常範 佐賀次郎

常宗 岡濱祖

常國 次郎

常定 衣山弥平次郎

常英 次良左門

常秀 弥平次郎

常行 右京進

常家

常勝 多谷八郎

常直 近江守

常信 忠家 勝家

常景

常定 佐賀民部少輔

勝重

常家 上總介

常時 同

常隆 同

常綱 匝瑳八郎

玄仙系

旧井常安 旧井二郎成常

常賢 又廣 逸見八郎 小見九郎

政胤 飯高四郎

六郎盛常 常清 四郎 太西胤常 左近將監興胤 某 瑞湖山四應寺開山 某 六郎高胤

常安 白井六郎

常忠 白井太郎

左近將監包 太郎冬胤 石之佐之胤 左近將監 四郎持胤 備前守俊胤 八道後重 為盛

常重 從五位下 下總介 法名照淨善應

常弘 匝瑳八郎

左三幸胤 太郎幸胤 左近父胤 結城 肥後二郎常 越後了明 朱五常教 源左宗俊 源左常定 源左常次

○成田恭詣記卷四

○十四

常衡 海上与市

常幹 海上

常滿 同

常継 同

常直 同

常清 同

常朝

常景 伊北新介

常仲

常茂 印東次郎

常範 木内三郎

盛常 潤野四郎

維常 大椎五郎

直胤 天羽庄司

直常 次郎

宇治會村 戰敗農介 小川系若秋 大名家 小川系 郎名基 基基

十蓮三郎并吉上在 源左常林 上名村 源左三 白井氏 源左三 源左友十郎喜始 女友十妻 女源八妻 源左健及 源常房 千華玄仙教美



廣常

上總權介梶原景時カヨリ頼朝殺之  
壽永二年十二月廿三日

常清

相馬九郎

貞常

左馬介

胤親

角田太郎

親常

白井十郎

太郎

女

小笠原次郎長清妻

賴次

一名康常金田小太夫  
三浦大介義明第七子額筆籠成

次郎

女

伯耆少將平時家妻

常胤

從五位下千葉介下總守護職母常陸大掾政幹女元永元年戊戌五月廿四日生  
建仁元年三月廿四日卒八十四法名淨春貞見 丑六位上

胤隆

小見六郎

胤光

推名五郎

有光

太郎

胤正

千葉太郎新介法名常仙觀宿母秩父重弘女建久中奉頼朝命伐奥州大河兼任有  
功建仁二年七月七日卒六十一居鎌倉竹谷永治十一年壬戌生

師常

相馬小次郎 為師國養子元久元年九月十五日六十七念佛行者無病而卒  
合手念佛如眠

〇十五

胤盛

武石三郎

胤信

大須賀四郎

胤通

國分五郎

胤頼

東六郎大夫  
從五位下

日胤

居圓城寺号律靜坊為頼朝禱祠治承四年從以仁王軍奮擊力戰手殺六人  
遂戰死於光明山頼朝公治世之後為法事領寄附伊賀山田郷三井寺早

常秀

北條九代曰嫡子式了大夫時二男修理亮政秀三男左門尉泰秀四男六郎景秀  
上總介左馬尉

觀秀

源平盛衰記作  
源平盛衰記作  
栗原禪師

能光

栗原禪師

秀胤

上總介

時常

埴生次郎  
一作埴

秀時

式了大輔同父自殺

秀泰

埴生修理介同父自殺  
一作垣

秀綱

五郎左門尉 同

曾襲領父食邑埴生庄秀胤  
奪之時常始而絶及開秀胤  
遭難忽入大柳館与兄同自殺

秀胤妻泰村女弟也  
北條時頼命大須賀  
胤胤氏東中務入道  
進討上總官太師  
積積於新於館外四  
敵兵未襲縱火燒  
威甚熾不可嚮近  
胤令兵士發矢自其  
入室竄而後自殺

胤忠 千葉五郎 邊田

胤朝 六崎六郎

胤廣 千葉四郎

胤時 千葉七郎

胤時 千葉八郎 家号白井

成胤 千葉介建保六年四月十日卒 五十七法名正阿弥陀佛

兵衛尉 六崎

太郎 六崎

景秀 六郎 円

胤義 千葉四郎太郎家号立沢

通胤 三谷次郎

胤村 三谷四郎

重胤 孫四郎

小四郎太郎

師時 千葉七郎

行胤 千葉七郎次郎 家号遠山形

師重 千葉太郎 家号神崎

義胤 次郎

胤俊 平田左門尉

胤信 平田次郎

○成田泰諸記卷四

○十六

為胤 四郎

胤長 六郎

時綱 七郎

時秀 八郎

胤定 千葉九郎入道信佛 鳴夫木

信清 千葉十郎 家号長吉

定氏 九郎次郎

行定 六郎

胤國 七郎

泰俊 三谷四郎

胤繼 三谷四郎太郎

義胤 千葉孫四郎

頼胤 又四郎

小四郎

四郎

親胤 孫太郎

胤繼

胤直 中沢弥太郎

胤幹 立沢又太郎

蓮心 周防

弘胤 法橋

氏胤 三谷彦四郎

幹胤

十郎

寂弁

平兵衛尉

資胤 平田四郎

胤與 彦八郎

信胤 平太

了意 治部

胤行 立沢七郎

胤義 彦七

胤親 余市

平八

胤泰 八郎 鳴矢木

十郎

理胤 僧

五郎

胤綱 千葉介承久 有幼安貞三年 五月廿八日卒

泰胤 千葉次郎

時胤 千葉介仁治 二年八月廿七日 卒年四月二木像在千葉寺有六家老所謂布施田谷大山鈴木伊藤森之

春胤 將國 常軍將長 文國 賴望

胤幹 弥八郎

胤高 弥八郎

小八郎

余市 後太平記

中祖 白井小太郎胤宗 承久二字治川ヲ渡シ有功

行胤 孫次郎 太郎丸

彦八

胤繼 孫九郎

胤朝 彦八郎 僧

圓仁 僧

胤釜 彦九郎

胤信 彦十郎

胤方 余一

胤友 中將少輔弟ト 家督ヲ争下總奪

胤秋 七郎

胤通 五郎兵衛

胤榮 判官

胤經 小太郎

道素 入道

○成田泰諸記卷四

○十七

胤賴 千葉介文永十一年八月廿六日 卒年三十七法名長春常喜

胤宗 千葉太郎新介 大隅守建武二年戰死於三井寺建武三年正月十六日三井寺戰千余キ三將トシ二木ノ破細川卿定禪カ六十二回ノ手勢ノ三百百五十ナリ

胤重 五郎

胤宗 千葉介正和元年 三月廿日卒四十五

胤貞 千葉介元弘三五十六始テ 義貞ニ屬武藏金沢貞 將武州鶴見義貞力建武在

詮常 長門守

滿宗 二即在二門尉 義滿將軍ニ屬有功

胤定 長門守若州ニ盤居ニ後太平記 四十卷將軍義昭信長ト確執ノ段ニアリ

胤親

基胤

滿常 城介

教常 左馬介

澄胤 將監

胤時 民部丞

胤晴 左馬介

胤在 若狭權介

胤貞 大隅守屬南朝後西征將軍赴九州領肥前 建武三年三月多良濱戰屬尊氏 建武三年十月廿九日住三河死四十九 女守都宮公綱妻

胤高 千葉新介建武三正十六三井寺戰死

胤高 千葉新介建武三正十六三井寺戰死

日祐 法花宗再興下總中山創建腕前松尾山 應安七十九七十三死

一本胤宗作時胤 云時胤卒時賴胤 三歲故胤宗介十九

八日伐尊氏建武四年正月十二日北國  
下降義貞後陣トナル五百キニテ  
打ケルカ雪ノ道ヲ迷ヒ御方ニテ敵  
陣ニ迷ヒ出尾張守高經イシキニ使  
ヲ召ハスニ高經ニ馬ノト參考太  
平記十七卷八十九ニ出觀應二正  
朔卒年六十一法名喜阿弥陀佛  
号淨徳寺

三八  
氏胤 千葉介天龍寺供養為隨  
兵善和歌新子載集ヲス

貞治二十九日病卒於美濃年  
三十一康永四八月九日時号  
新介

酉譽上人 幼名徳千代了  
譽上人弟子  
武州傳通院  
開山

九四  
滿胤 千葉介志永世三六日卒年空四  
法名道山弥阿弥陀佛号  
常安寺

氏滿 千葉次郎

○成田泰諸記卷四

胤鎮 千田弥二郎

胤朝 肥前守

胤盛

胤次郎

胤九郎

胤元

胤教

胤勝

胤繁

○十八

常光 原次郎  
常重 原次郎大夫

清常 五大夫  
胤重 三大夫

重綱 三大夫  
政常 三大夫

常尊 三大夫  
貞常 系彩大夫

兼胤 千葉介修理大夫永享二年六十七  
日於鎌倉卒年三十九法名喜山

胤阿弥陀佛有四家老原田城寺  
半尾 高城也

十  
康胤 馬加陸奥守法名相常應

屬成氏有功任千葉介康正二十一朔  
戰死上總八幡村年五十九首八  
送京泉東寺四塚

善胤 胤治

胤頼 実太宰少貳資光三男

胤誠 勝利 大和守

長良 刑ア太輔 家良 大炊介

常氏 對馬守

胤氏 多古

胤清 千葉右京大夫延文四七月筑後新  
少貳忠資三屬

義胤

胤滿 法名日園 胤春 千田 志永 壬日卒

一  
滿胤 常安寺

兼胤

胤直

輔胤 兼道号 未野寺

自秀

七郎千葉 介法名元三

孝胤

實胤

守胤

胤直

千葉介康正元全十五日為古河 成氏自殺於下總多湖年四十二

法名常瑞臨阿弥陀佛号相忘母管 領上杉右乃佐氏憲禪秀女

賢胤

中務丞同先死母月 法名了心

胤幸 千田彈正

胤仲 千田力等丞

胤範

千田 法名送範

胤親

千田喜兵衛

胤嗣

千田 法名日嗣

高胤

小太郎 千葉介

胤房

胤連

千葉常陸介 九州住

胤平

胤親

介

宗景上座

光胤

原豊前 寛正七二七卒

實胤

千葉介後道世卒於美濃 上杉政實ノ婿

自胤

千葉介 文明十年攻下總 早城取之遂領下總海上 武藏葛西石濱赤塚

盛胤

武州千葉中務 母上杉彈正

良胤

同次郎 号松月院

惟胤

胤持

康正二年六十二日卒年二十三 法名大覺興阿弥陀佛

輔胤

竹慶岩橋殿 按二兼胤弟養子イニ介 延徳四二十五日卒年七十三法名常阿弥陀佛

孝胤

千葉介 文安元生 永正二八十九日卒年六十二イニ三法名常輝眼阿弥陀佛 康正二父戰死ノ氏十三之按二輔胤ノ子カ孝胤ノ生輔胤ノ二十八ニ當ル

胤房

越後守

胤真

式ア大夫

胤榮

大蔵丞 豊前守

胤将

早世新介

宣胤

五郎享徳四八十三日総州多胡阿弥 陀堂ニテ自殺

勝胤 十三 千葉介享德五廿二日卒六十三法名常歳其阿弥陀佛有三家老原鳴矢木木内之

幹胤 十四 文明四年水正年四十二當 常陸人鹿島左三尉養子 兵法名人

勝清 常陸人推崎五郎養子

久胤 勝胤同母生半身偏枯 家臣公津左近大夫養子 信胤 公津平内左

昌胤 十五 千葉介天文十五正七年卒 法名常天法阿弥陀佛 利胤 十六 千葉介弘治三八月七日卒年三十一法名 常賀覺阿弥陀佛

胤定 千葉鳴戸八郎 兵ア少輔

利胤 大永五生 親胤 元龜三生

胤富 享祿四生 實利胤第三弟 良胤 千葉介多病ヨリ第三子 當胤 知胤

邦胤 重胤

○成田恭詣記卷四 ○二十

親胤 千葉介天正七五四為北條氏政害ル年十七法名常圓イニ依原逆心生害利胤第四弟 イニ舅小田原氏政命家臣生害

胤富 十五 千葉介天正十三五七年五十五イニ利胤第三弟七年五月四日法号重ア之

邦胤 千葉介 天正十六五月乘醉斬家士銀田万五郎還テ創ル病創死

重胤 千葉介介母上野岩松氏寛永十年六十六日卒江戸五十二

女 母小田原北條氏

相馬

師常 相馬小次郎

義胤 五郎

胤綱 小次郎 一三繼

胤繼 四

常家 矢木六郎

胤家 矢木式大夫

行常 戸張八郎

春胤 民平入左

忠胤 九左尉 上野介子三人

頼泰 冷左尉

時綱 七郎

胤盛 甲左尉

胤景 市左尉 胤宗

胤經 五郎 左兵衛尉 法名茂林

胤村 相馬孫五郎左尉 永仁二年卒 任將軍頼朝宗尊

○成田泰諸記卷四

○廿一

胤氏 次郎 左門尉 下總相馬 又作氏胤

胤氏 胤忠 下總相馬祖 胤重 奥州相馬祖

胤顯 彦三郎

胤基 次郎

胤重 四郎

胤重 甲左尉 射手

有胤 五郎

胤忠 冷左尉 下總相馬祖 上野介

師胤 松若丸彦三郎 奥州相馬祖 左尉

胤長 小次郎 左尉

胤朝 八郎

忠重 四郎 左門尉 勢兵精射 建武二年 山門之役 属官軍 与本間孫四郎源資 氏同射賊兵大頭名

胤實 十郎

胤通 余市

胤宗 小次郎 左門尉 資胤 上野介 月桂

胤門 彦五郎

胤儀 左門尉 法名在桂

行胤 弥次郎  
朝胤 次郎兵衛  
女 号鶴夜又治胤母也

重胤 弥五郎孫五郎胤門養子建武二年國司合戰屬斯波三市於葦堂忠死法名致叟

親胤 出羽守

光胤 弥次郎 建武二月與州打死

胤頼 治部少輔松鶴丸 讚岐守

○成田泰諸記卷四

憲胤 千代王治了少輔法名洞岩

胤弘 孫次郎讚岐守法名道空

重弘 長門守

高胤 出羽守法名大雄

盛胤 大膳大夫

顯胤 讚岐守 天文十八三死雄公莫宗

盛胤 彈正

義胤 長門守

利胤 大膳大夫

胤高 左近大夫法名幸山上野介

胤實 彈正忠左門尉法名正安

胤興 三郎三田彈正常陸介家紋巴

胤德 小次郎下總守号宝珠卷三子了り

胤勝 三田彈正武州三田庄将門官建立

興秀 師岡次郎

胤定 三田彈正 政定

胤廣 修理亮因幡守法名天桂

○廿二

胤貞 小次郎法名花桂世々總州相馬住

胤清 小次郎左近大夫 玉案

整胤 小次郎天正十七六月十八日為家臣生害法名玉宗實山

治胤 左近大夫法名了山 天正ノ頃

秀胤 小次郎法名春山仕家康公 天正十八年召出サレ五千石

胤信 信濃守法名中岩

盛胤 小次郎法名天崇齊

政胤 小次郎 大坂御供

貞胤 小次郎 某 小平二



義胤 大膳亮

慶安四日卒三十三

勝胤

長門守實土屋民了少輔  
忠直次子後改忠胤

貞胤

出羽守

○成田泰諸記卷四

○廿三

武石

胤盛 武石三郎

胤重 次郎入道

廣胤

胤村 二郎左門

朝胤 三郎左門 文忠比

長胤 小二郎七郎入道  
相摸守時頼遊去弘長比平兼介頼胤同時

胤氏 四郎左門

宗胤 肥前守佐木遠江守氏信女嫁

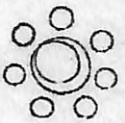
五郎

胤繼 孫四郎左門尉  
奥州船廻人戰討死

胤道 武石五郎 但馬守

大須賀

旗紋



幕紋



亂信

大須賀四郎建曆年和田義盛亂有功賜甲州并上庄

二道

通信

太郎左門尉

早世

亂季

多部四次郎左門尉

一秀

亂村

荒見小四郎

重信

奈古谷七郎左門尉

宝治亂三浦黨於法花堂自害

範胤

成毛八郎改君島十郎左門尉

移下野

宝治亂泰村打後奔下野依守都宮賴  
綱居本州君島鄉改氏弘長元年辛酉  
八月七日卒五十八法号道昌

○成田泰諸記卷四

○廿四

朝胤

一胤朝  
同太郎

信常

一胤  
太郎

貞康

二郎左門尉

朝村

又五郎

泰胤

孫四郎

貞宗

左門尉

時綱

四郎左門尉  
法名宝蓮

胤光

一本成胤元則泰了

成胤

左門尉三浦行泰女

永仁三未四十三法号道忻

貞範

祖母并左京介

常光

胤泰

胤元

胤兼

五郎左門尉  
法名宝胤

宗兼

又五郎

師胤

孫三郎

胤親

左門尉

胤時

十郎 正六位備中守六郎

建藏三月參河矢作戰改義貞賜  
感狀曆心元八月去日五十六卒号長基

富高

岡本信濃守

六月十七日越後芳賀禪賀三屬  
是利基氏兵若松持國力郎木金井新  
左二門下組ヲ刺違死

綱胤

備中守母守都宮時綱女

觀忘二年陸奥山戰屬尊氏有賜感  
狀三月与桃井直常長尾左門尉戰死  
上野那和郡死三十三号道慶

胤連

四郎左門尉

行胤

左門尉

胤義

同

遠康

胤氏

同

胤重 風見新左門尉

胤景 大官兵了少輔

胤光 延生二郎左門尉

女 茶師寺三川守紀綱之妻

泰胤 四郎 後五位下備中守  
母守都官氏家盛綱女

延文三年正月廿二日卒道謹

知胤 四郎備中守母女子出雲守紀貞正女  
明德二年三月二十日甲子号道成

○成田泰譜記卷四

胤元 四郎備中守女備中守綱經妹  
延永廿六月廿三日二十三号道清

秀胤 平次郎備中守母守都官氏綱妹  
延永三十四九月二日卒五十五号道善

貞久 祖母井信濃守

光胤 三郎備中守母提原輝正女  
長祿元年五月十日四十九号道善

女 長山修理亮忠好妻

茂胤 八郎備中守母塩谷左門大夫義孝女  
文明十四三月六日三十五号聖高

定胤 七郎備中守母今泉俱馬高光女  
永正四六月廿四日四十二号道白

胤家 六郎備中守母吉生上總介義雄女  
大永七月八日三十三号道高

女 神山下總守綱藤妻

頼孝 孫四郎 一秀

貞泰 五郎

胤頼 四郎二郎

行泰 四郎

胤繼 左門二郎

胤頼 六郎

春胤 四郎

氏頼 金房丸 弥二郎

朝胤 孫三郎

良胤 郷房

胤盛 又次郎

胤繼

胤房

○廿五

胤氏 次郎 決即左門尉法名信連寛文五丁未六六月  
上總介打手大將上總一宮大柳館ヲ攻秀胤  
ヲ打取

師氏 次郎

時通

信康 五郎左門

宗常 四郎左門

為信 六郎左門

為胤 二郎左門

景氏

頼氏

朝泰 左門尉

顯朝

朝氏 新左門尉法名信圓

廣胤

太郎左門尉母壬生美濃守高宗女  
天文十九月廿七日那須戰死於  
五月女坂年三十三道崇

慶繁

僧宇都宮光明寺及桂連寺願山

女

戶祭下總守妻

高胤

五郎備中守母芳賀刑了大補清高女  
慶長二六月十五日五十八号道山

高範

左馬亮

胤次

太郎左門尉

女

益子左京亮妻

胤泰

朝泰

時朝

二郎左門尉法名禪信

宗朝

下野前司  
法名信宗

宗時

下總守

宗信

越後守  
法名生應

憲宗

左馬助

高晴

三郎

慶長中於上三河戰死

晴胤

又次郎

寬永元十月十三日三十八  
道聚

照胤

熊之介  
母櫻井氏

○成田泰諸記卷四

○廿六

興胤

大須賀十郎  
母高橋氏

胤方

君島六郎

國分

胤通 國分五郎

常通 四次郎

常朝 小次郎  
法名悟連

有通 小五郎 号村田

重常 小次郎

常義 同六郎 太戸矢作領主

朝胤 孫二郎 号松沢

胤實 太郎 又太郎

朝俊 孫四郎

常氏 六郎

光胤 孫五郎 胤秀 又五郎

胤義 平太 号大戸川 定胤 平太六郎

胤盛 孫三郎

行常 六郎五郎 行泰 孫五郎

泰朝 孫五郎

七郎五郎 龜王丸

胤門 六郎 胤貞

○成田泰詣記卷四

○廿七

竹王丸 彦五郎

弥五郎 鶴金丸

長胤 又六法名了性

朝綱 孫五郎  
松沢惣領

胤村 彦次郎就外戚所領

余五

泰胤 号春社彦六郎号矢作惣領

胤重 余五  
法名蓮性

通泰 八郎

道光 僧

胤氏 孫六

理法

治時 十郎

事法

氏胤 余一

胤達 彦五郎  
法名宗常

胤任 小六郎

明鑒 郷阿闍梨  
又号公一

幹胤 太郎

胤幹 彦三郎

御房丸

信胤 五郎太郎

師泰 孫五郎

朝通 彦五郎  
法名信聖

胤幹 六郎

頼泰 七郎

胤頼 孫七郎

頼通 十郎

頼覺 大進房  
本名淨一

盛村 小三郎

小六郎

又五郎

宗通 彦六郎

胤朝 孫五郎

胤頼 孫六

乙若丸

千代若丸

○成田泰諸記卷四

○廿八

東

一 胤頼

東六郎大夫一後五位下

二 重胤

太郎兵衛尉法名覺然一平太武者所兵衛尉入道  
太納言為家右大臣實朝歌道傳授

元久三五月廿三日白山重忠討伐大將北條義時先陣葛兵衛尉後陣堺平二入常秀  
大須賀四郎胤信國分五郎胤通相馬五郎義胤与重胤武藏國二保川三戰有功  
壬四月廿七日父弱冠ヨリ祓候ノ例ヲ以致望勤任建保二甲戌七月廿七日大倉右大臣慈寺供養隨  
兵六年戊午五月廿七日右大將鶴岡拜賀隨兵七年己卯正月廿日將軍右大臣拜賀隨兵

胤朝

木内下總守承久二年六月十四日戰有功但馬磯部在淡路由良左惣領号次郎

胤康

風早四郎入道  
承久二六十四字治有功

康常

太郎左門  
康元三丁巳十月廿日大慈寺供養隨兵

胤光

小見六郎

為康

次郎

頼康

孫四郎

真舜

金蓮房

貞泰

彦四郎

○成田泰諸記卷四

○廿九

榮尊

胎蓮房

時秀

泰宗

胤家

木内次郎磯部庄傳 寬元二甲辰八月十五日鶴岡供奉

景胤

孫次郎

胤時

月四郎号小見由良庄傳 按下總四郎一考  
東鑑寬元四年二見二

胤直

月四郎  
法名道源

胤長

月五郎

胤氏

六郎号虫幡

胤盛

本名時信号油田七郎法号道胤

胤俊

八郎

成胤

八郎太郎

胤光

九郎号田部

泰胤

弥九郎  
法名一祥

公胤

命二郎

九郎次郎

胤定 十郎

行胤 日余一

信元

幹胤 孫次郎

胤持 彦五郎

惟胤 彦次郎

胤長 十郎元弘三年三月三日鎌倉葛西戰死

胤祐 余次郎

胤忠 又次郎

滿犬丸

義胤 七郎次郎

胤繼 弥七郎未分配田立憲領

定胤 式部房

胤元 小六郎

胤信 彦七郎

胤教 孫八郎

胤持 弥七 法名撰阿

胤清 小六郎法名良清

盛胤 六郎四郎

静胤 鄉房

祐胤 六郎

圓胤 少貳房

胤光

胤貞 又六

祐潤 大夫阿闍梨

胤顯 孫八

○成田恭詣記卷四

○三十一

胤次 六郎太郎

胤義 又次郎

胤成 弥九郎

有胤 四郎次郎

胤久 六郎

圓祐 大輔禪師

樂胤 弁禪師

胤貞 小六郎 改胤勝

妙然 六郎入道左門尉 黑衣

胤盛 彦四郎

胤景 七郎

宗源 覺性房

胤家 弥六

胤勝 八郎

胤氏 中務丞

貞胤 六郎右門尉 改清胤

胤宗 三位房

政胤 八郎

胤繼 六郎

宣胤 小次郎



政胤 孫四郎

胤氏 又四郎

胤國 彦次郎

胤行

二從五位下為家歌道相得東鑑建長四年中務法名素還一六郎中務入道承久三年巳辛四守治戰美濃國郡賞之

胤方

海上次郎法名道胤建長四年十月十七日父子隨兵胤方為後陣

胤久

四郎

胤有

海上五郎 森戶領主

安貞戊子七月廿三日駿河前司義村田村庄渡御隨兵寬元二年八月十五日賴嗣鶴岡放生會御覽供奉仁治四年癸卯七月十七日御所詰番聚

兼胤

五郎九郎

○成田泰諸記卷四

泰行

因書介法名行還建長五十七日雖撰隨兵先之婦國不如例

義行

四郎建長三年辛亥二所進祭隨兵

素源

六郎左門入道

顯信

盛義

六郎

胤義

孫六

重義

七郎

○三十一

胤見

孫六

治胤

六郎

胤豐

兵庫介

盛胤

本庄氏東七郎法名妙覺

長胤

海上四郎

行胤

中務丞 号船木 法名理一

胤世

七郎太郎法名良圓

朝胤

号辺田 六郎法名慶胤

資胤

高上弥七 法名理慶

胤基

松本九郎 法名善覺 建曆三月三日和田義盛乱打死

九郎

胤景

阿玉郷主海上弥次郎左門尉備中守 建長四年二月十七日將軍鶴岡供奉先陣隨兵弘長三年八月八日來十月三日必定上洛供奉隨兵註文

胤行

胤朝

木内下總次郎

胤方

海上赤次郎 海上祖

胤康

風早四郎

胤景

弥次郎備中守

胤泰

女 佐竹遠江守貞義妻 刑ア大輔義篤女

胤長

成胤

胤文 馬場十郎法名見一

胤門 弥十郎法名伴阿

胤郷 又次郎

秀胤 胤清

親胤

有胤 七郎左門尉法名成高

胤俊 叔父理慶跡續

胤茂 法名定意 建武三宗胤屬為官軍有功

直胤 中務丞法名秀海

胤名 六郎中勢少輔

胤國 東孫太郎先父早世

高胤 孫次郎下總守実阿

朝胤

資胤 高上弥七 理慶

胤基 松本

胤文 馬場承久元巳卯 右京權大夫兼時大 倉高之御供奉隨兵

行長 助二郎丹後守先父死 八月六日左兵尉弘長三素還追善懷命之經ヲ書ス將軍夢想ニヨツテ也

胤長 イ仲隨兵三撰ルニ先歸國依テ不例

教胤 横根郷主太郎左門

胤泰 海上惣領六郎左門

師胤 筑後守法名理性

女 佐竹義篤女

公胤 八郎法名理慶

憲胤 筑後守忘永禪秀胤 属持氏有功

信濃守

胤貞 長谷左門五郎

胤忠 胤顯 常陸介

胤廣 常陸六郎 幹胤 弥七

為胤 小四郎 胤名 四郎左門尉 信阿 等阿

胤名 弥七郎 一香

有胤 弥七郎左門尉成高 叔父資胤養子

胤俊 左馬介 祖父実阿跡 廣胤 七郎又阿弥土丸重名 仍五九早世

胤家 幸満丸 甥廣胤跡

有胤 七郎左門法名成高 実高胤子

○成田泰諸記卷四

○三十一

胤是 中務

胤耀 六郎

胤秀 次郎左門尉亮覺  
胤元 左京亮亮全

胤氏 出羽守

胤光 六郎 本滿胤

胤壽丸 六郎

胤行 一本  
胤重 中務少輔  
下野守素通  
後行氏

泰行 因書介

義行 四郎

胤村 六郎左門入道素源

胤女 歌人前刑部少輔忠成朝臣室忠成三浦  
泰村一味毛利入道西阿為同意然レ  
胤行一宮ノ功ヲ賞シ當歳ノ小兒ト凡ニ  
胤行ニ預ケラル

胤行 一本

行氏 從五位下下野守  
素道 素阿之  
素道

時常 新續撰作者

女 歌人  
續拾遺作者

胤村 平大素源  
新續拾遺作者

常顯 從五位下中務大輔下野守  
法名素英天龍寺供養供奉人  
元弘三年四月六波羅籠城衆ニ東三郎左  
二門尉氏時アリ可考淡河左京亮通時  
ニ屬ニ東寺西七條ニ陣シ赤松因心ヲ打

○成田泰諸記卷四

○三十三

師氏 從五位下下總守明德三相國寺供養隨兵  
五人内第二番亮永廿九年卒

胤綱 改益之後五位下式部少輔下總守  
素明

胤數 從五位下下野守宗玄

常菴 和尚木蛇寺

元胤 三郎早世  
妙童院  
胤胤 中務官内少輔  
素珪

常縁 從五位下下野守素曉又素傳

時常 一本  
胤村 常顯 師氏

總州東庄三十三郷并美濃郡上郡在城  
自承久二至文明志仁乱ノ并關東下向間  
為齋藤妙椿攻落ル常縁詠和歌妙椿  
ニ送ル敵感之以城ヲ帰ス古今集令傳  
授公家無双歌人

胤數 前皇後皇語集三葉  
常兼十三代  
尚慶 下總守

頼數 官内少輔  
素光

頼數 元胤 六郎  
常慶

常和 左近大夫

胤氏 素純歌人入集  
山黑六心ヲシモ  
オササミヒツ  
木向ノ秋ノ  
夜月

胤女 盛數妻

胤縁 遠藤新兵衛  
實盛數弟

頼房

盛數 實遠藤新兵衛胤好子  
婿養子初東後遠藤

尚胤  
法名素經

常氏

胤基

胤直

慶隆

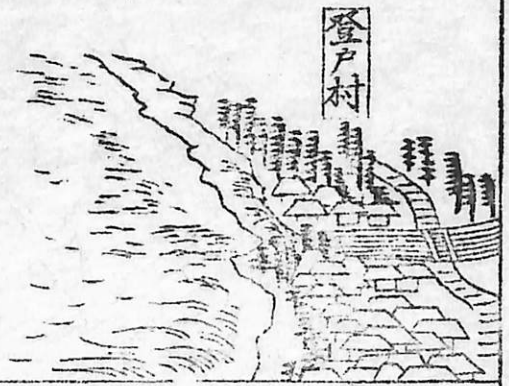
宮内少輔法名素山壽昌院  
自為家御古今相傳至承祿  
年中十六代正統也

遠藤大隅守  
秀宣仕文祿  
四年朝鮮二病死

○成田泰詣記卷四

○三十四

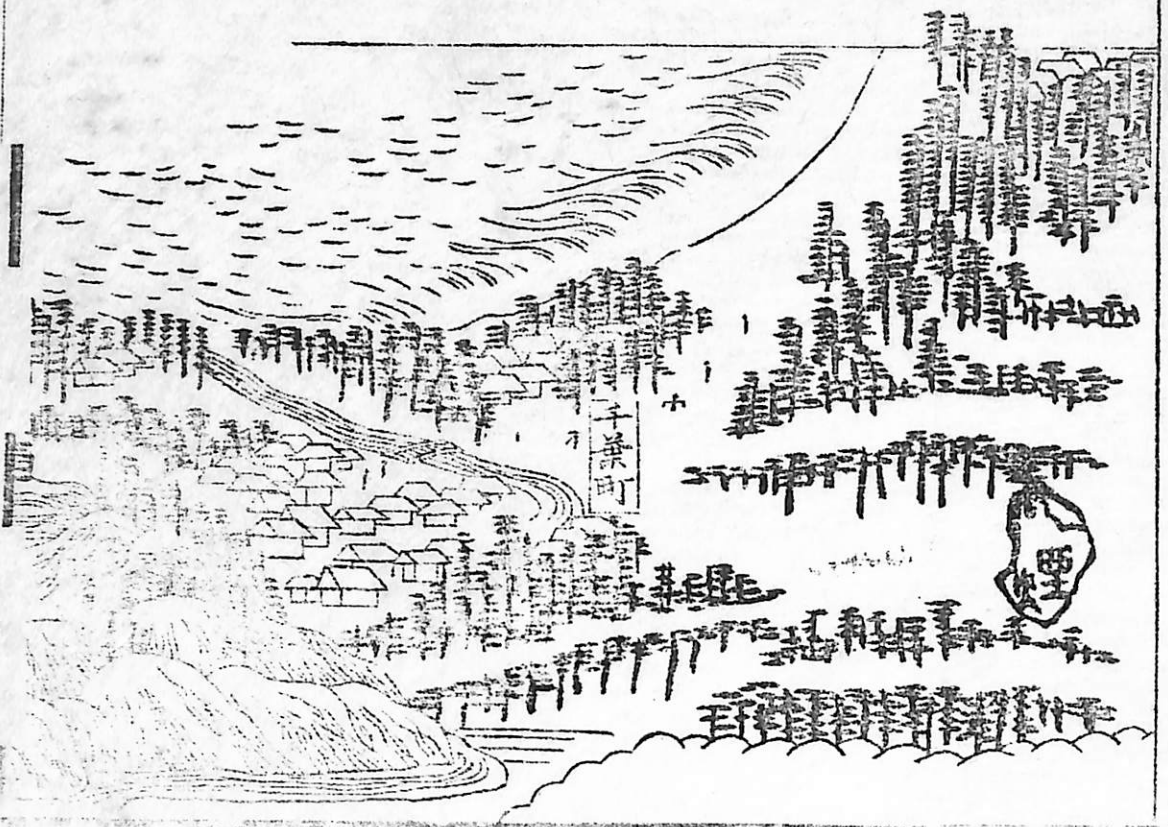
千葉氏故城  
址の圖



治承四年の夏月末の比武藏國  
藤原の郷とくまの信吉社  
神拜しとてとてを修る  
千葉介平常胤

あつたれて  
くせやるりぬ  
とての  
とての

うきひしけ  
うきひしけ





○成田恭詣記卷四

○三五

○千學集小大治元年丙午六月朔一めて千葉と立つ凡一萬六千軒あり  
 表八十軒裏八十軒小路表裏五百八十餘小路之曾場鷹大明神とる御達報  
 稲荷の宮に御前まで七重の間御宿之曾場鷹より廣小路谷部田まゝ國中  
 此諸侍の屋敷を置是は池田鐮木殿の堀内を御宿八御一門之宿の東園城  
 寺一門家風たがひ申宿西原一門家風たがひます橋より向御達報を  
 八宿入屋敷あり申不ふつて河向と市場とをより千葉の守護神ハ曾場鷹  
 大明神堀内午頭天王結城の神明法蓮報の稲荷大明神千葉寺の龍藏  
 権現是たるを弓箭神と申妙見ハ幡摩利支天大井是たり千葉御神事  
 ハ大治二年丁未七月十六日より始るなり常重御代御事之御幸假屋ハ神  
 主八人社家八人乙女四人御祭に御舟ハ宿中の老若に役たり供物ハ千  
 葉中野十三貫とる同関錢諸侍衆上げ申一関ハ假屋の供物と神  
 主にとらせ一関ハ老若小とらせ御祭と勤り結城舟ハ天福元年

癸巳七月廿日より始るる時流の所伐の事之所後下は所送の所舟なり  
結城の村督小安倉出雲守よりその永鏡をとり取立しその之結城今  
は寒川を大治二年所神事始より天正二年甲戌より凡三百四十二年之

○東路ははせに十四日十五日千葉の崇神妙見の祭禮とて三百足の早馬代

見物之と見えゆ 千葉の桑八倍しるるにともれり神と考時  
千葉の五根と親に是を統へりけり

龜澤山清光寺 元佐倉村小あり寺領五拾石 天正十九年  
年外十月 浄土宗江府三縁山

未なり本尊は阿彌陀如来関山と月峰上人と云寺は傳ハ天正中二世無算師

大樹寺殿は所齒骨を負関ふ下り所く遍歴いたされし処因縁ありとく

考寺に任せられ山内清浄の地を獲み埋葬せられける其後 神君東金

鷹野の帝尊等并和尚當國在任の由関宮を所尋ふ付即東金所伺

小器りりて所齒骨此地に埋葬は旨申上依處所感の上東金より當出

所入りと終あり所一宿遊りは終所齒骨所廟所系治法墓とるに厚

○成田恭詣記卷四

○三六

朴と植をら終ハウの木ハ子孫長久の基瑞祥の靈樹をると仰ら終惟

りしと云く玉垣ハ慶長中土井家より建立せられしと云代々佐倉領主持

なり 城中五塚と字せし他も清水と云  
あり万代殿供所の用とありと云

同所藏佛阿彌陀如来銅像背面識 長一尺  
六寸許

橋氏女橋

同觀音銅像背面識 長一尺一  
寸五分

貞智光念菅原田阿定阿道阿

順阿

慶範并妙圓感助定慶 平代  
日氏 恒阿

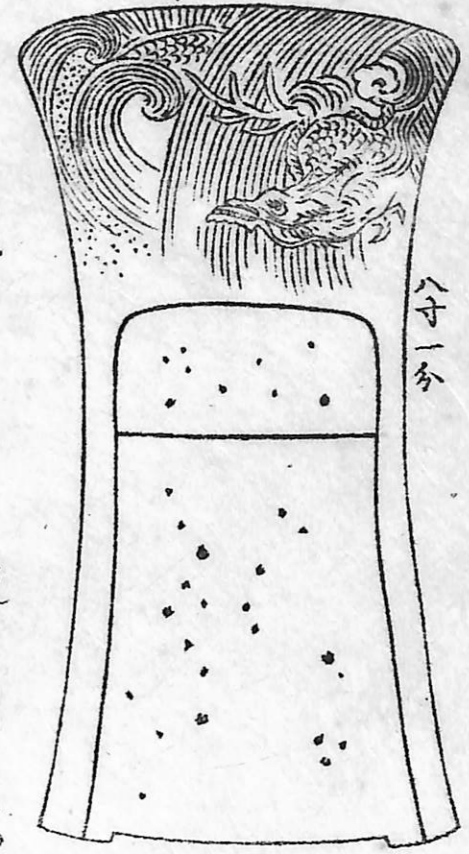
沙弥西心

正安二年九月日願阿道田

平氏女

待モア道阿

同所藏古硯 石質金眼アリ



常歳山勝胤寺 大佐倉村 寺領廿石 天正十九年 辛卯十月 禅宗曹洞派土室

祥鳳院末 本尊釋迦如來開基享祿元年 千葉介勝胤 天正廿二年 五月廿日卒 開

山華翁祖芳和尚 天文廿年十月 八日示寂 域中千葉家代々の墓碑數基あり勝胤

系の末 鵠字を多社へ其詳なることハ知る處あり 庭内小池

あり千葉水と号に一古杉ありと云と掩へり 當時寺領七十五貫文附と録し 殘欠の古簿小のすは佐倉風土記見ゆ

地藏堂鵠識

總之下州印播郡大佐倉村常歳山境内地藏堂

○成田系諸記卷四

○三七

所藏教授文 黄銅僅ニ入此三行其一斑ニ

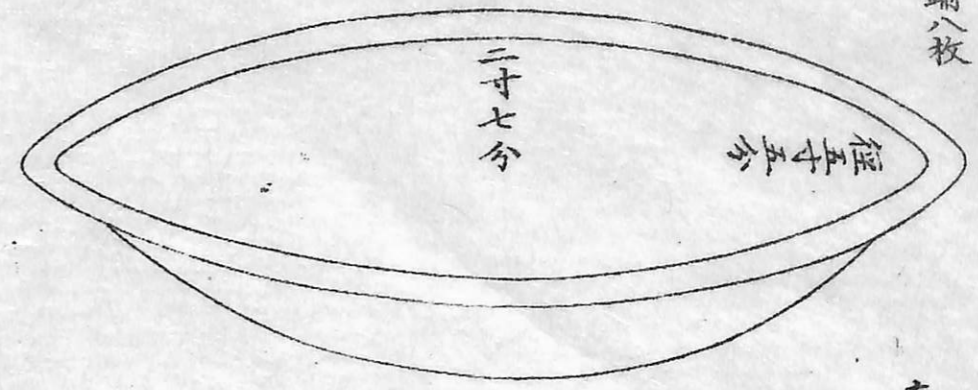
八寸三分

教授文

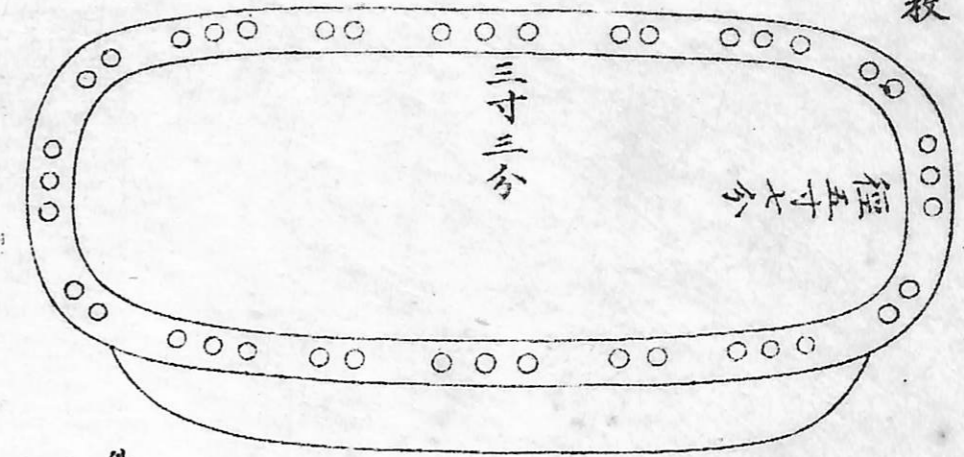
夫諸佛大戒者諸佛之所護念也。有佛、相授有祇、相傳。嗣法超越於三際。證契連綿於古今。吾大師釋迦牟尼佛陀附授吾迦葉。

千葉家陣皿 地金真鍮

真鍮八枚

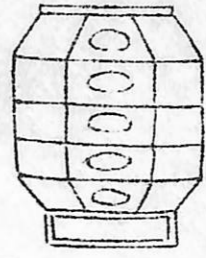


真鍮十枚



朱漆沈金三重高八寸徑八寸  
上唐繪樓閣人物中種繪了

組重



底

從五位平朝臣

勝胤寺公用 徑七寸



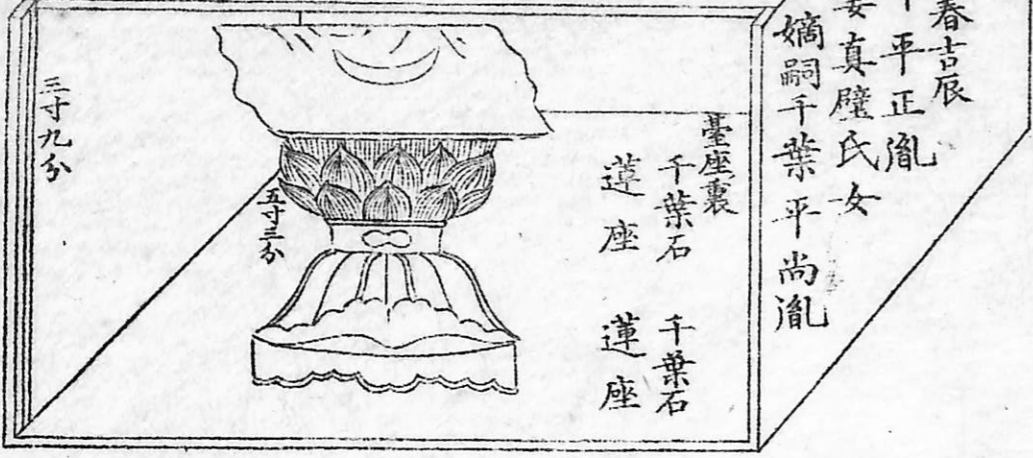
笏室置之

外ニ 九穴貝石濱栗 龍馬角  
天狗爪 漆付細口ホアリ

○成田參詣記卷四

○三人

石燈文者辨井  
也且之萬計者  
速之萬計者  
納鳥柳以奉  
於其屋中而  
運新製銅光  
鑄工伊藤而  
尚哥村字和  
常紀奈村字  
紀奈村字十  
寄納勝胤  
寺之大重  
原也之當  
器授來先  
家以祖  
良石者  
此葉石  
寺



在于家  
寬文壬子仲春吉辰  
千葉介平正胤  
妻真壁氏女  
嫡嗣千葉平尚胤

臺座裏 千葉石  
蓮座 千葉石

蓋裏

寄納銅函式箇  
千葉石  
常森山勝胤寺

無量壽佛



同木皿

朱漆沈金 徑五寸

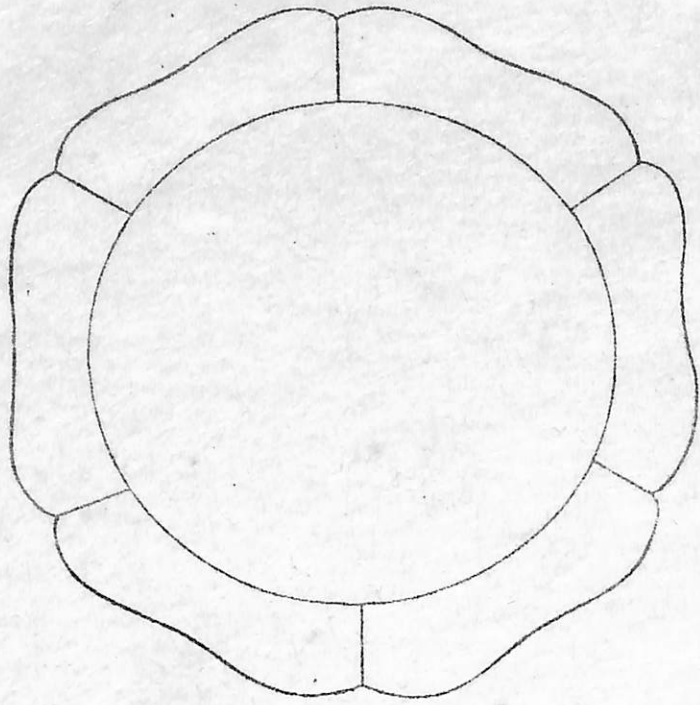


六枚

外六枚底黒漆沈金繪亦異ナリ

○成田齋詒記卷四

朱漆八枚 徑三寸四分



底



徑二寸六分

○三九

徑三寸二分

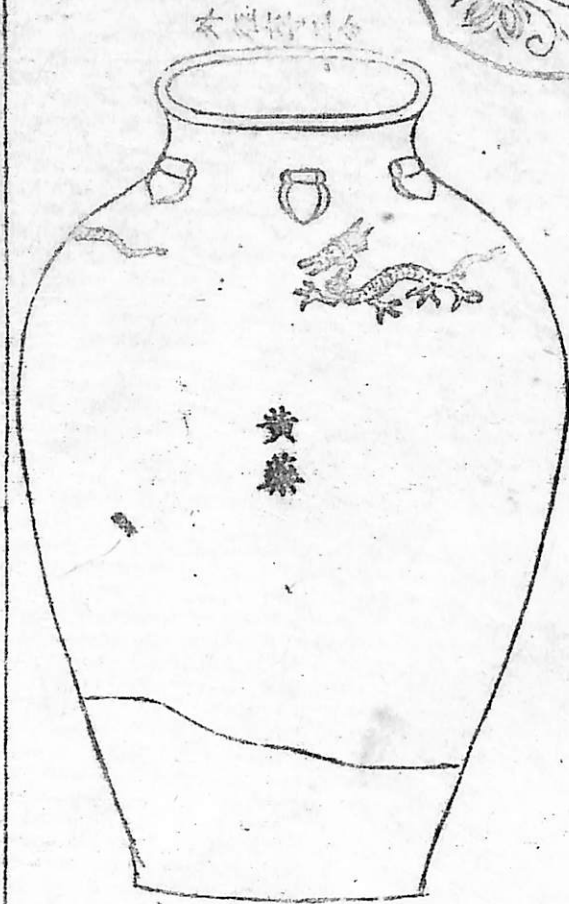


底

鏡 徑三寸九分  
厚一分五厘



外一徑一尺五寸九分坐蒲團ノ如切テリ當四錢形ノ  
鏡ヲミテリ祖芳ノ遺物ナリト云



瓶子 二尺

○成田叅詣記卷四

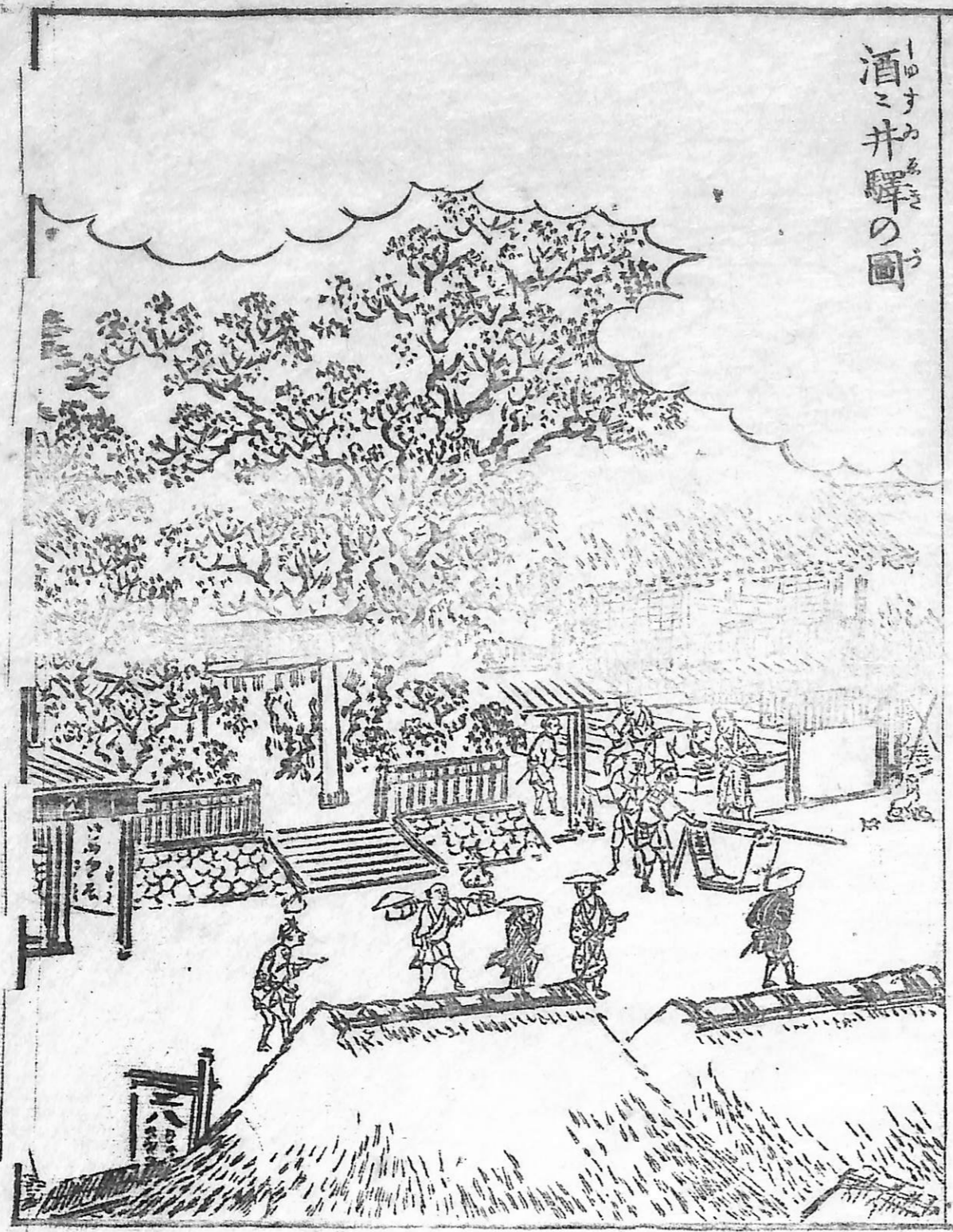
○單

本佐倉町正谷山  
長勝寺 鯨口徑一分

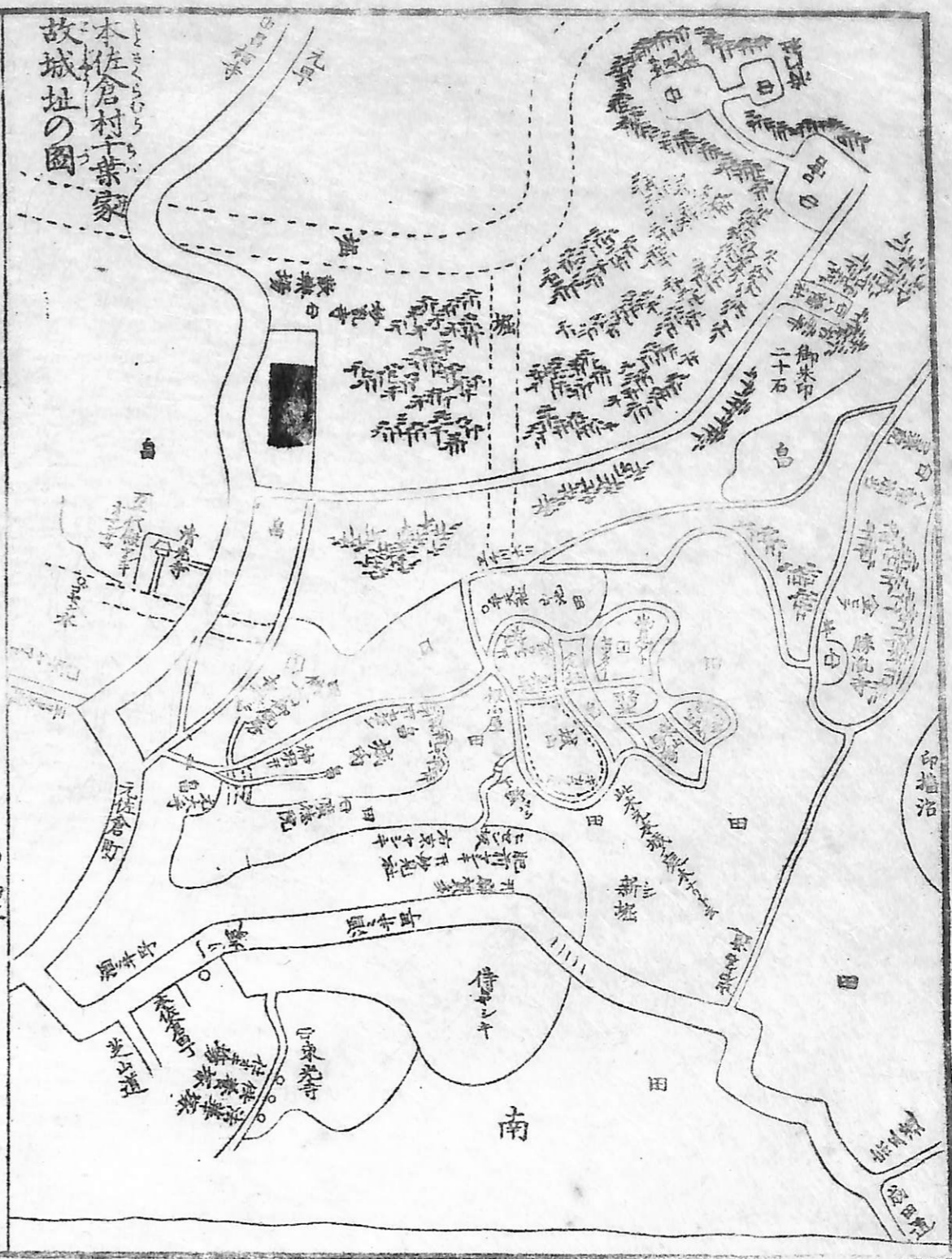
福德二年八延德三年  
才頭白八常陸小田ノ  
一族下総二掛錫香取  
郡大根村三文明十八年  
逆修ノ碑アリ頭白八常  
仙雜話ニ詳ナリ  
或云瓜連常福寺過  
去帳享祿元年戊子  
三月朔日大田極樂寺  
開山虛海齋庭海称  
頭白上人トアルト和光  
院年代記ニ村松ヲ再  
興セシメ人確説ナリ小田  
ノ族タルハカミナラズ  
常仙雜話ハ東國戦記  
ノ類ニテ証トハナシカク



尉求之



酒井驛の圖

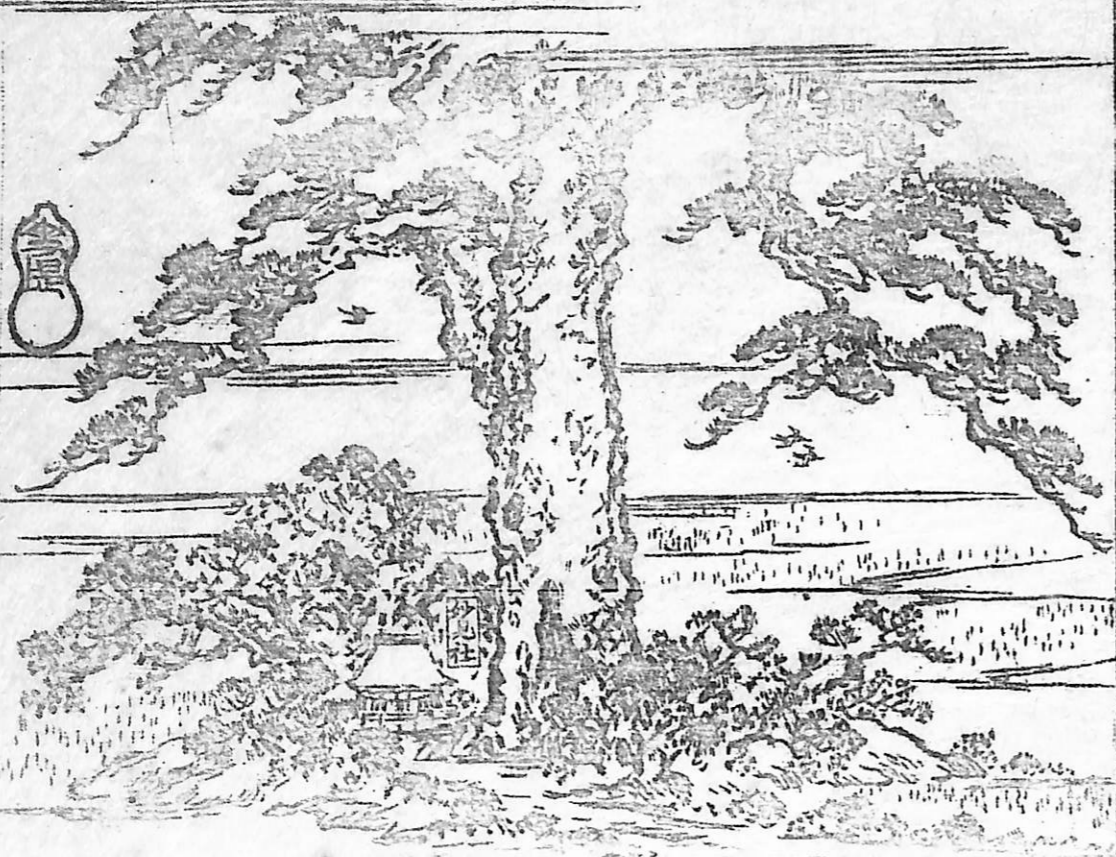
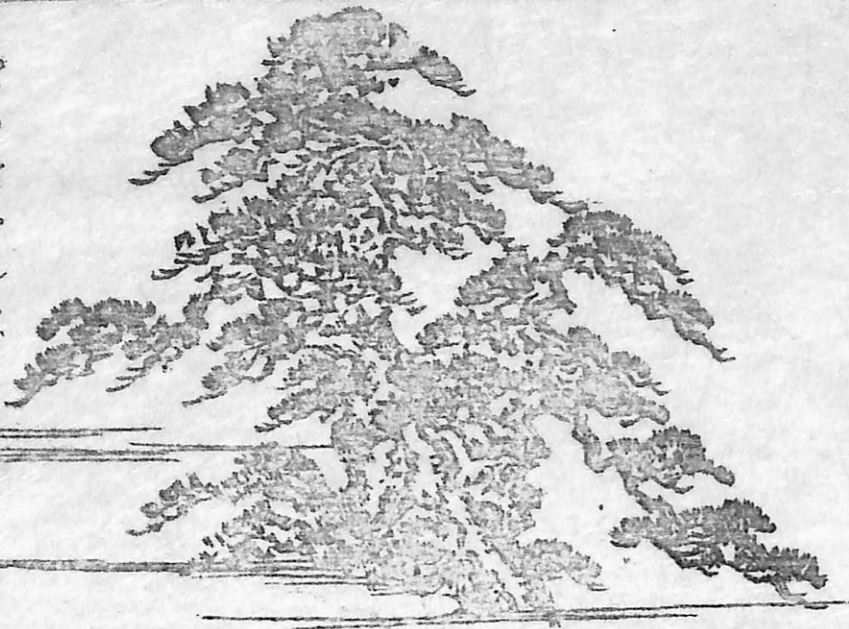


本佐倉村十葉家  
故城址の圖

○成田泰譜記卷四

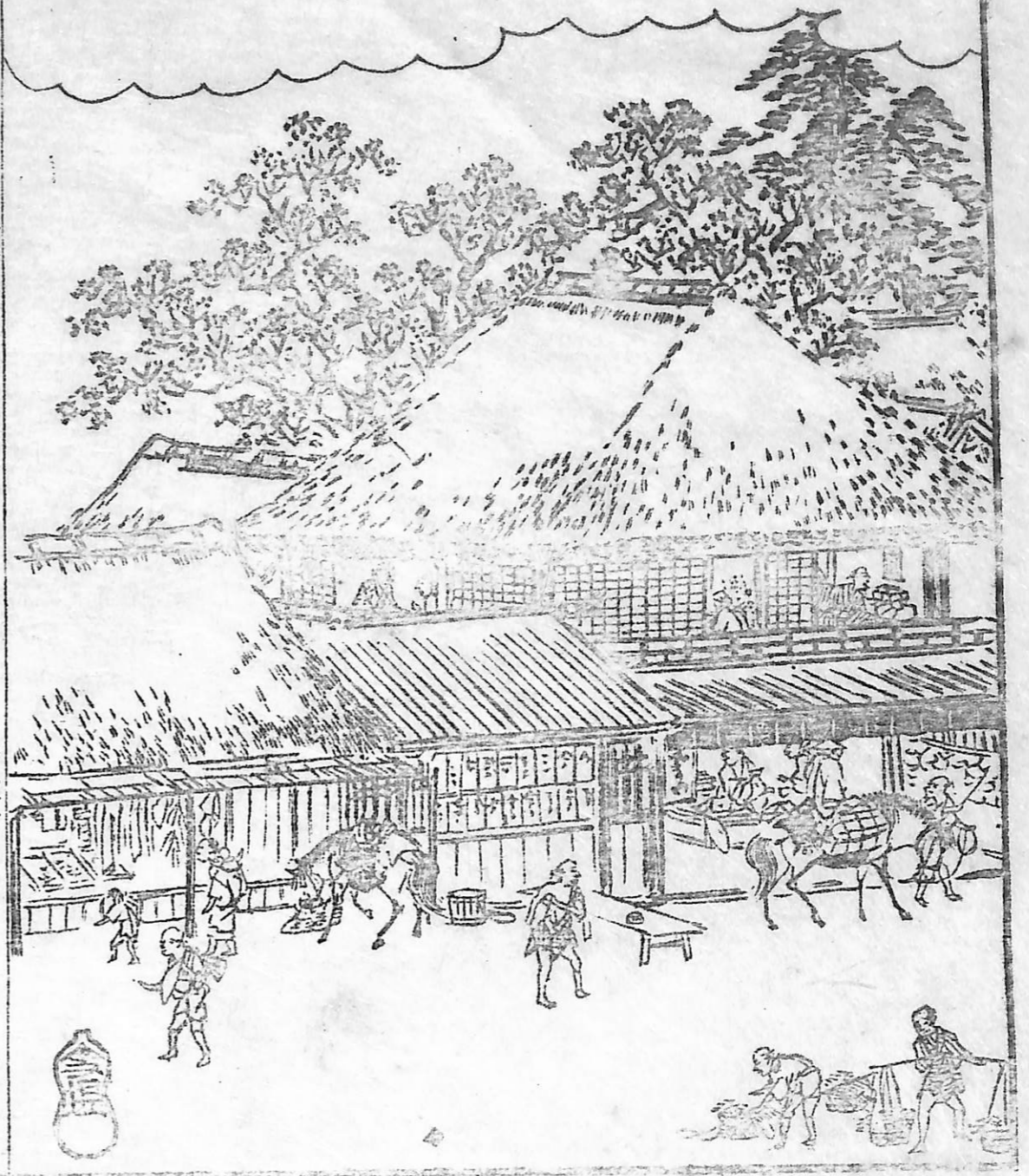
○四十

酒之井驛砂見社傍老松と云  
 俗小肥前坂八抱松と云



○成田奈詣記卷四

○四



印播沼 沼のあらは湖なり 郡名とにけりく沼の頭りに稲葉村あり井  
 川の川上は 是より負せたる是源ハ數條あり一ハ戸神平戸に間より奈  
 里ハ林佐山の向より里末を共に舟尾の下まで合一廣六町はる東  
 南の方へ一里不と流き師戸にいたり鹿島橋の下りて物井川と寄き  
 廣六二町許とを是より東北の方へ一里半不と流き平賀ふいたり是より  
 北小折を弥張太小なる其廣二里をうりて印播埴生に二郡小垣り安食の  
 地にて利根川へ入る其入川の口凡そ二三間と云沼中噴水穴多あり土人  
 サク子穴と云秋冬の交鱈魚水に温氣を好み此小集多故名はくと大なるハ  
 吉高と下小二所安食の下に七町に里流人武小竿を豎り力と極めて投す  
 小水清みおれとも其影とらんて程とて暫して浮出といふも餘程深  
 こそことく見ゆ大さる孰そ一二間四方なり常小水とふき出にる絶えれ  
 ども水お上へ揚る程ふあらは夏日溢雨時をり沼上小陰火あり或聚り

○成田参詣記卷四

○里

中川埴 より  
 印播沼を  
 望むの圖

苔清水  
 水を足て  
 濁る  
 魚貫



中川

此地每家井水  
噴出清冽愛  
之

流波山



成田泰譜記卷四

〇甲田

或散あちちり忽とろとろち遠とほく忽とろとろち近ちかく亦また一奇觀いちきくわん之

○佐倉風土記云江之為景不宜于平者蘆葦遮望也而宜于登覽矣其  
登覽者平賀為佳飯野次之畑收水澄下鑑萬頃環浦之山如揖如  
坐如走如駐翠屏畫閣者平賀之望也浩々大江一條鎔銀以為長  
帶水匹練沙禽飛鳴風和日斜而面富士峰于其千里表者飯野之  
眺也凡環江村三十神也保品也青菅也先崎也白井也三停也萩  
山也飯田也大佐倉也柏木也下方也北須賀也八代也大竹也酒  
直也安倉也俱連印東而起於乾繞于免離震以終于北為船尾也  
松崎也吉田也巖戸也師戸也鎌刈也瀬戸也松蟲也萩原也中根  
也笠神也皆連印西而起終甲繞於印東為

佛林山淨泉寺 印繪郡伊藤村あり曹洞宗常陸國多賀郡杉室天雄  
院小属は閑基栗飯原胤身閑山新江周恩和尚 明應四年乙卯 奉尊十一面觀  
七月八日新

音ハ粟飯原豊後守胤光胤光長小作又左近將監と稱す守中をたり延徳二年原成八月

十八日建立テ周恩とて寺をたじむ周恩ハ移室の二世也此寺其をり周心

院と云此時馬加原胤光の系事を取りしと見え文書も胤光より千葉補胤の時給りし方々胤光ハ明應四年乙卯十月二十一日死年三十八法名月

憲常輝僧此僧も大権院ハ任持に壽星任持此僧も大権院ハ任持に當時伊篠ハ胤光大居士居り

地と見え胤光死後子右衛門三郎胤信周心院と改父の法名とて寺号とせ

胤光永正五年戊辰十二月十日死年五十七法名寒翁淨泉居士○明和七年寺祀ハ

伊篠の並本と李道並本と云此地李道新甲と稱す此ハ土井家の代官カレリと云

延喜式諸國騎路邊植果樹令往還人得休息若無水處量便掘井

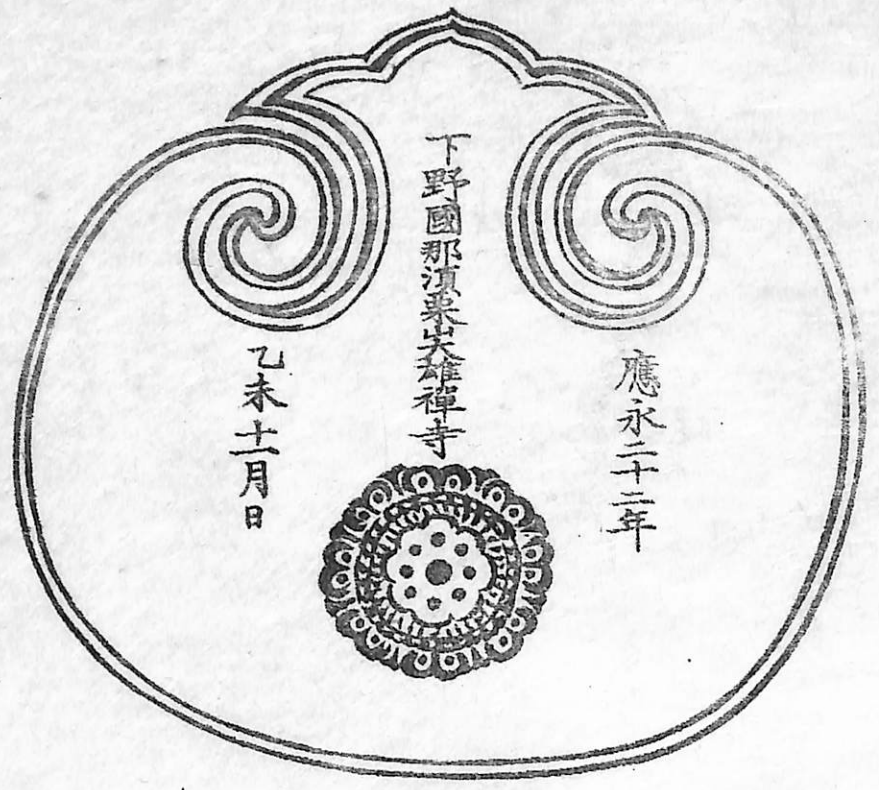
○甲斐叢記卷三北史韋孝寬為雍州改路測一里置二土墩處植椶代

為周文帝令天下效之一里植一木二里植二木百里植百木

○成田參詣記卷四

○四十五

淨泉寺所藏銅雲版豎一尺五寸七分 横一尺四寸三分



應永二十二年

乙未十月日

寛文十庫戌歲夷則日過去帳叙ニ天文廿三年甲寅七月吉日淨泉院寄進粟飯原イナノ  
胤滿開基寄附之守本尊之後背ニ如定朱漆ニ書付有之也トアリサレト今ハ差コミナシ

列觀經卷

臺坐ノ裏圖ノトキ  
識アリ妙觀ハ胤光カ  
母堂ニヤ

○成田恭詣記卷四



長一尺許

此處過去帳佐倉風土記ホニ舉タル識語ノ付シ  
サシコミ有シナルベシ

○四六

廿十六

所藏文書

伊東庄伊藤少村事  
粟飯原豊後入道淨泉  
仍止与周心院於上成  
菩提所ハ次普光寺  
ニ宗比丘尼如母ニ加  
扶持ハ世々御子孫ニ  
不レ有レ遠ニ於件  
明徳ニ  
十一月九日常輝  
粟飯原豊後入道

相守亥父左ト相照レニ  
依レ金山并持以神宮  
古儀例可レ飲念河  
廣念古儀伊藤少村  
事周心院ハ寄進也  
又正レ有レ遠ニ於件  
永正六年九月八日  
粟飯原少村事

成田恭詣記卷四終

竹口貞齋刻



